

わくわく国際交流

深川国際交流協会 広報誌 Vol.4 (年末号) 1998.12



北海道・カナダ姉妹都市会議に参加して

深川国際交流協会 理事長 小滝 聰

継続的な交流展開

11月13日、芦別市のスター・ライトホテルにおいて第9回北海道・カナダ姉妹都市会議が開催されました。

現在、道内にある姉妹都市24市町村のなかから、14市町村19名、7交流団体13名、それに道庁と主催者の北海道カナダ協会から4名、合計37名の参加による会議となりました。深川市からは百貫企画部長と協会を代表し私が参加しました。

会議は林芦別市長の歓迎挨拶に始まり、各自治体のこの一年間の交流活動を順次紹介するという形式で進められました。各自治体間には多少の温度差があるものの、おしなべて安定的、継続的な交流が展開されていることが報告されました。ただし、2~3の自治体でカナダ側の不況が原因で交流の規模を縮小せざるをえないこと、また、依然として言葉の壁があり苦労していることが報告されました。一方、最近の傾向としてコンピュータの利用により通信業務が飛躍的に簡略化されたことが知らされました。

深川市の活動報告

深川市の報告は、一番新しいと言うことで最後でした。百貫部長より、姉

妹都市提携にいたる市としての取り組み、特に97年の河野市長を団長とする訪問団、98年の大西助役を団長とする訪問団の「覚え書き」調印、アボツフォード市長を団長とするカナダ側からの訪問と深川市での調印式の様子を紹介され、今後4年に一度は双方から代表団を派遣する約束をし、永続的な交流を進める旨が報告されました。

その後、私から、深川国際交流協会として「市民」が国際交流の輪に加わる広がりを持った活動を展開してきたこと、そして、深川の場合、1990年から既に拓大とフレーザー・バレー大学との交流があり、その基盤の上に今回の提携があったことを紹介しました。また、9月15日に協会が主催して、歓迎の広場が開催され500人以上の参加をいただいたことも合わせて報告いたしました。

カナダスクールの開催も

姉妹都市会議の後、カナダ協会主催のカナダスクールが同会場で開催されました。その時にゲストスピーカーとして来られたカナダ大使館のブルース・パーネット広報文化部長の講演が大変興味深いものでしたので、その要旨を紹介いたします。

・・・カナダはまさに多文化社会で今後もその傾向は進む。2008年には白

人人口が50%を割りますます多くの文化が共存する社会となる。日本との関係は良好ですが西部からの木材、石炭輸出が不況を反映して減少している。カナダ製の小型ジェット機が沖縄から3機発注があった。カナダは国際平和にも貢献している。例えば地雷除去、少年の徴兵禁止活動などで先進的な活動をしている。今後も日本との関係を深めたい。文化面でも経済面でも交流を深めたい。そのために姉妹都市関係が発展する事は大切だ。・・・

流ちょうな日本語とユーモアをまじえた話に会場は堪能させられました。

今回、深川市からは初めての参加でした。各地の交流活動を知り、経験交流ができたことは意義深いものでした。

《深川国際交流協会の近況》

- 4月30日~6月26日 拓殖短大留学生受入事業の実施 (留学生5名・ホストファミリー15家族)
- 6月15日 インターナショナルデーの開催
- 9月15日 深川市・アボツフォード市の姉妹都市提携を祝う市民交流会の開催

- 11月13日.....第9回北海道・カナダ姉妹都市会議に参加（芦別市）
- 12月13日.....青少年カナダ交流訪問団報告会の開催
国際フレンドシップフォーラムの開催
- 12月9日～26日.....IPC学生受入（ニュージーランド：1名）

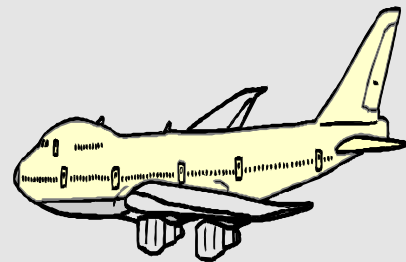
✂ 今回の年末号では、青少年海外派遣事業（カナダ）交流団員の交流を終えた感想が中心になります。

【1998年度青少年海外派遣事業の概要】

1998年7月27日から8月11日の行程で、青少年海外派遣事業が実施されました。交流団員は8名の中学生・高校生と2名の引率者で構成され、カナダを訪問しました。

月日	主な研修内容
7/27	深川市発～アボツフォード市到着
7/28	ハリソン ホットスプリング見学
7/29	乗馬体験・英語の授業
7/30	バンクーバー市内見学
7/31	アグリフェア（農業祭）見学
8/1	ホストファミリーと過ごす
8/2	ピクトリア旅行へ出発
8/3	ソルトスプリング島へ
8/4	ソルトスプリング島見学
8/5	ヘルズゲイト見学
8/6	フォートライナー見学
8/7	ロングハウス見学
8/8	さよならパーティ
8/9	ホストファミリーと過ごす
8/10	アボツフォード市出発 （深川市到着 8/11）

団員名	学校	学年
木村 梨恵	深川東商高校	3
東出 麻奈	深川西高校	1
大野 耕平	多度志中学校	3
宮崎 恵	深川中学校	3
山本 真澄	一巳中学校	3
横田 育子	音江中学校	3
藁口 佑妃	深川中学校	2
宮田 清香	納内中学校	2
引率指導者名	所属	
松田 俊雄	国際理解部会長	
岩崎久美子	海外交流部会	



神様サンキュウ

木村 梨恵（深川東商高校3年）

これといった楽しみがなくて、ただだと毎日を過ごしていました。もしかして、もしかすると、とてもつまらない学生生活になるかもしれない、いつも考えていました。

そんな時にカナダに行くことが決まり、今までのありふれた日々がまるで嘘のように、私をイキイキとさせてくれました。神様、サンキュウと思いました。

私は英語に関して、多大な興味を持

っていたので、10代のうちに外国へ行くというささやかな夢が叶ったのです。

今回はメンバーひとりに対して一家族のホストファミリーがお世話してくれることになりました。私たちアサナ・ヤスコ・メグミ・マスミ・コウヘイ・ユウキ・サヤカは、それぞれ独自の個性をたずさえていたので、みんな自分の色の生活を送ることができたと思います。かの私は、それはそれはたいそう良質な

日々を過ごしました。ゴージャスといっても過言ではありません。日本と生活様式が違うので、そのせいもあったのだと思います。

私の家は、バスルームが2つあったので、それだけでも豪華さを満喫しました。

食事も私好みの洋食。カナダではそれが普通なのですが、私にとっては素晴らしい衣食住だったわけです。

暮らしだけでなく、何がもっとも感

動したかといえば、ホストファミリーの温かさです。わずか 3 日目でアイコンタクトを交わす仲になれました。ママのキャロルは私のことを大切にしてくれましたし、私もキャロルを親友だと思えるようになりました。

家族はいつも会話を交わしていましたし、私もその温もりと愛情をいっぱい感じました。カナダへ行き学んだことは、たくさんありすぎてページの関係上お書きできませんが、ひとつづらいは書きたいと思います。人と人とのふ

れあいには、歌と片言の言葉があれば充分向上できます。何はともあれ、こればかりは経験しないとわかりません。

みなさんに、ぜひカナダへ行くことをおすすめします。



劇的な再開、そして別れ

東出 麻奈 (深川西高校 1 年)

私は、今年の夏休みをカナダでアバソチュールに過ごしました。初の海外旅行どころか飛行機初体験でした。何はともあれ、最高の Happy Days で、あ～思い出ただけで顔がにんまりしてきます。しかし、ロマンスだけは無かったです。期待した人、すみません。そこで候補者が多すぎたことにしておきます。

この旅はすてきな出会いがいっぱいでした。色々な出来事もありました。G

ちゃん & Jeff との再会。2 人ともバカでスケベだったけれども好き。いかしたご夫婦マルコム & デニス、私のホストファミリー、みんなのホストファミリー、みんなとっても可愛らしかったです。

東出麻奈は、カナダの大自然の中、出会った人々を目いっぱい愛してきました。私は改めて自分がチビッコだと思いました。カナダは何もかもでかかったです。人、心、自然、ゼーンぶ・・・。

そして、深川とアボツフォードの私の第 1 回の交流で、歴史に残る別れを告げられました。涙がとめどなくあふれ、そして鼻血もあふれて出てきてしまいました。

みんな本当にありがとう。アイラブユー。



考えながら話す体験

大野 公平 (多度志中学校 3 年)

ふるさとの多度志を立ち、母国の日本を離れ、7 人の仲間たちと共にカナダのアボツフォード市へホームステイに行ったことは少なからず、僕を大きくしてくれたと思っています。

行くきっかけになったのは、教頭先生にすすめられたからです。最初は冗談だと思っていましたが、本気ですすすめていてくれることがわかり、野球部の顧問の先生やメンバーのみんなに迷惑をかけながらも面接を受けに行きました。

数日後、教頭先生の握手により、幸運にも合格したことがわかりました。その後というものはあっという間に過ぎ、気づけばもうカナダにいるといった感じでした。この時の僕は期待より不安の方が勝っており、あの時のやりき

れない思いを今でも覚えています。

そして、仲間たちとも別れて、ホストマザー・ホストブラザーと一緒に家へ向かう時、孤独という言葉が似合うような、そんな心境になっていました。

しかし、ほんの数分後、そんな言葉は忘れ去ってしまいました。Adam (ホストブラザー) と話をするのも楽しいし、毎日午前中には色々な所へ研修に行き、帰ってきてからもどこかに連れて行ってもらい、美味しい物を食べることができ、カナダでの生活は最高でした。

そして何よりも、たくさんの人たちと出会えたことが、僕にとって大きな収穫だったと思います。確かにまわりの人たちと言葉が通じないというハンデがありましたが、かえってしっかり話を聞くようになり、考えながら話すことが

できたので、僕にはとても良いことだったと思います。

この他にも作文には書ききれない、言葉では言いきれないくらいたくさん思い出を作ってきました。

そして、その思い出を 7 人の仲間たちと共に作れて、とても良かったと思います。

別れ際にホストマザーに言われた『Because you are nice boy』という言葉をお忘れず、僕を大きくしてくれた思い出を大切にしていきたいと思いません。



カナダに行って

宮崎 恵 (深川中学校 3 年)

7 月 27 日からの 2 週間、たくさんの思い出ができました。

カナダでは、午前中は学校で英文で日記を書いたり簡単な勉強をして、午後は他のメンバーと一緒に湖や乗馬に

行きました。それが終わるとホストファミリーとの自由時間でした。

私の家族は買い物やプール・アメリカ等、私が行きたいと思っていた所へ連れて行ってくれました。他にもバンク

バーの花火大会や海にも連れて行ってくれました。とても優しい家族でした。

カナダに到着した日はとても暑い日でしたが、その後はわりと涼しい日が

続きました。

食べ物は、私の家ではホストマザーがフィリピン人ということもあって、フィ

リピン料理やお米の料理も出てきました。行く前はとても心配していた英語も、ホストファミリーがちゃんとわかっ

てくれて、何とか通じました。今度また機会があればカナダに行って、ホストファミリーに会いたいです。



“旅”を終えて

山本 真澄 (一已中学校3年)

カナダから帰国してから、もう1ヶ月半が過ぎました。カナダのことを思い出すたびに良い経験をしたな!!と思います。毎日が素晴らしく、“たいくつ”という言葉は一度も出てきませんでした。今日は湖へ、明日は乗馬、明後日はバンクーバーへ。家へ戻ると Garth と一緒に卓球・ゲーム・ショッピングなど、すてきな思い出となりました。

素晴らしい出会いもありました。ホストファミリーはもちろん、日本からの留学生れい子さん、あつ子さん、韓国人のソーニャン、岩崎先生のホストファミリーのライアン、バスの運転手さん、書ききれないくらいです。みんな、とても良い人たちでした。

でも、そんな人たちと別れ、この旅一番の悲しみでした。

この旅のおかげで、自分が大きくなれたような気がします。一人でもやっていけると思いました。

今は受験勉強で忙しいので、カナダのことを思い出しているヒマはありませんが、たまに布団の中で「みんな元気かな」と思い出しています。

素晴らしい旅をありがとうございました。



カナダの友達

横田 育子 (音江中学校3年)

私はカナダでの生活で、たくさんの素晴らしい思い出を作ることができました。その中でも一番の思い出は、カナダのホストファミリーと一緒に暮らしたことです。ホームステイなど私にとっては夢のまた夢のようなことでした。家族とうちとけることは難しいと思っていましたが、みんながとても優しく、私を本当の家族のように接してくれたので、とてもうれしかったです。そして

色々なところに連れて行ってくれたり、庭の掃除・散歩などをしたりして、私はすっかりカナダでの生活に慣れ、とても気に入りました。

また、車で学校に行き、半日は勉強をし、もう半日はスクールバスで色々なところへ行って、今までにない楽しい体験をしたこともとても好きでした。私はカナダに行って良かったなと思ったことは、色々な人に出会えたことで

す。他の国に友達がいるということは、色々なことを知ることにもとても良いことだと思います。そして、友達を作ることは私の密かな目標でもありました。それが実現できて、私はとてもうれしいです。今もその交流は続いていますが、これからもカナダでお世話になった人たちと手紙などを通して交流していきたいです。



カナダの研修で

簀口 佑妃 (深川中学校2年)

今回、私は2週間のカナダの研修に行かせていただきました。

アポツフォードは聞いていたとおり、緑が多く深川に似ていて過ごしやすかったです。

ホストファミリーも、本当の娘のように接してくれ、言葉も充分に通じない私を理解しようと親切にしてくれたこととても感謝しています。

ママの作ったブルーベリーパイの

味……。今でも時々思い出すほど美味しかったです。

カナダの研修では、カナダの文化を色々学び、各国の留学生との交流を持てたことは私にとって、とても良い経験になりました。

充分な英語では話せませんでした。気持ちが伝われば何とか通じ合えるものがあることを感じました。

自分自身を相手に伝えようと努力

できるようになったのは、この機会があったからだと思います。

一緒に行った友達とも仲良くできて良かったと思います。

今回カナダに行くにあたって、たくさんの方の応援や協力があったからだと思います。

この思い出を私の宝物のひとつとして大切にしていきたいです。

ありがとうございました。



カナダでの思い出

宮田 清香 (納内中学校2年)

私はカナダでホームステイをしました。ホームステイした家の人たちはとても優しく、何でも望みをかなえてくれました。買い物に連れて行ってくれたり、海・湖へ行って一緒に遊んでくれたりもしました。アメリカにも連れて行ってくれました。カナダの人は良い人ばかり

なんだなと思いました。

こうやって思い出してみると、私はホストファミリーにあまり喜ぶようなことをしてあげなかったなとちょっと後悔しています。もっと会話をしたかったなと思いました。英語がわからず辞典を持っていき、言いたい言葉をさがしました

が、文をどうやってつなげばいいかわからなくて単語だけ言って通じなかったりで、あまり会話もはずまずたいへんでした。だから英語がもっと上手になったら、もう一度会いに行き、ホストファミリーの笑顔を見たいと思います。

カナダの研修によせて

義口佑妃さんのお母さんより

国際交流が盛んになり、世界が身近に感じる今頃、機会があれば我が家でも子供たちに経験させてやりたいと思っていた矢先、娘からカナダに行ってみたくて話があり、この度深川市・国際交流協会の皆様方のお世話になり、参加させていただきました。

今まで、自分から物事にあまり積極的に取り組むタイプではないと思っていましたので、全て自分の意志で決め行動したのは、親としてもこの子にこんなエネルギーがあったのか？と少し驚きもありました。

同行したお友達ともすぐに仲良しに

なれたようで、事前研修の頃より楽しい時間を過ごすことができたようです。

今回、このような機会をいただき、娘は自分をアピールする難しさや大切さを大勢の人たちから色々な形で愛を感じとったようです。

2週間もの滞在期間ホームシックにもならず、充実した毎日を楽しく過ごせたのは盛りだくさんの興味深い企画を準備して下さった関係者の皆様をはじめ、ホストファミリー・同行していただいた皆様のおかげと娘共々感謝申し上げます。

この体験が娘の人生の中のステップの一段となることは間違いなく、たくさんの貴重な思い出は深く心に刻みこまれることでしょう。

最後になりますが、深川市とアボツフォード市が姉妹都市となりましたことを心から祝福申し上げます、今後の国際交流の発展を子供と共にご期待し、お礼の言葉とさせていただきます。

「青少年海外派遣事業」に参加させて

大野公平君のお母さんより

『あ～あ、もう着いたんだ。全然帰りたくなかったのに』

市役所前で、我が子の帰りは今か今かと待ちわびていた私たちに発した開口一番の言葉でした。

7月27日、深川駅で見送る際は親も子も興奮状態だったのでしょうか、たくさんの人の中で気軽に送り出すことができました。

見送りを終え、我が家へ帰る車中で、『あっ、あれを持たせるのを忘れた』『あっ、あれを言うのを忘れた』と次々と忘れていたことを思い出し、もう行ってしまった後ではどうしようもないと後悔していました。

我が子が今、どうしているのかを電話で気軽に聞くことも、誰かに聞くこともできないということは想像以上に辛いことでした。

そんな時、小滝先生から『みんな、元気だそうです』と電話をいただいた時は、胸のつまる思いでした。

しかし、カナダでの当人は、毎日が楽しく充実した日々だったようです。何ととっても、ホームステイ先のお父さん・お母さんは、とても優しくユーモアのセンスもあり、楽しくのびのびと生活できたそうです。

遠い日本で心配ばかりしている私に代わり、カナダのお母さんはよく面倒

を見ていてくれたのです。『ありがとうございました』という言葉が届くとうれしいのですが…。

今回のカナダ行きでさまざまな体験と、日本に帰りたくないと思えるような素晴らしい感動をたくさん与えていただきました。また、私も子供を旅立たせたことで色々学ぶことができました。この海外派遣に参加させていただいたことに感謝しております。

最後に松田さん、岩崎先生、大変お世話になりました。また、事前研修などでもたくさんの方々にお世話になりました。

本当にありがとうございました。

末長い交流の一步

松田俊雄(引率指導者)

国際交流協会の目玉事業である青

少年カナダ交流訪問団の一員として、

約半月のカナダでの生活を体験させ

ていただくことができました。

全員がひとりずつホームステイしながら、カナダの生活と歴史を学び、名所地を見聞できたことは子供たちにとって貴重な経験であったと思います。

アボツフォード市民との地域的交流はできませんでしたが、ホストファミリーを通じて、カナダの生活習慣等を学びとることができました。

引率者としての心配は、子供たちがホームシックにならないか、体調を壊

すものはないかということでしたが、8人の子供たちには無用の心配でした。それよりも私の方が、英語がわからないことによるストレスがあったように思います。

今後、アボツフォード市との姉妹提携により、相互交流が促進されることと思いますが、カナダと日本の生活習慣等、相異することが数多くありますが、お互いを尊重しあい、急がずじっくりと交流を進めることが大事かと思

ます。来年からはカナダの子供たちの訪問もありますが、気負わず普通の深川を見てもらうことが大事であり、カナダを訪問した子供を中心に受け入れができれば、訪問団の目的が達成されることと思います。

カナダのプレーザー・バレーってなに？



～ 拓殖短大第 6 回カナダ研修団参加メンバーの手記～

拓殖大学北海道短期大学では、今年の 8 月 25 日から 9 月 13 日の期間で第 6 回カナダ研修団（学生 12 名・引率教員 2 名）を派遣しました。行き先は、カナダ ブリティッシュ・コロンビア州アボツフォード市のプレーザー・バレー大学です。

研修団派遣の目的は、カナダの社会を実際に体験し、理解しようということで、保育科の学生は主として幼稚園、保育所、福祉施設で見学実習をしました。農業経済科の学生は、農場・試験場・加工工場を見学しました。また、経済コースの学生は、企業・各種製造工場を見学しました。

今回は、研修団の学生、引率教員の手記を掲載します。

タイタニック・グッズにおおはしゃぎする小滝・岡本！

拓殖大学北海道短期大学保育科 2 年 藤澤 尚樹

奇跡が起きたのはカナダに来て 1 週間目の土曜日、あの小滝先生が私と岡本先生をアメリカ日帰りツアーに誘ってくれた。小滝先生のことだから、何かたくらみがあるはずと思っていた私だが、ホストの悪ガキたちと一緒にいるくらいなら、その誘いに乗ったほうがまだましと思い、一緒にアメリカに行くことにした。

小滝先生は、カッコいい愛車(?)に乗って私の家まで迎えに来てくれた。アメリカ目指し出発すると、小滝先生がやけにウキウキしていた。「これは絶対に何かあるな」と思い、先生に尋ねたところ、「実は、ゴルフのドライバーが欲しいんだ」と返事が返ってきた。その時私は、「ゴルフは道具じゃないよ」と言いたかった。

結局、ゴルフショップ巡りとなり、

そこでは必ず小滝先生のゴルフ談義を延々と聞かされたのだった。その上、将来はシニア・プロツアーに参加するという夢を私に語っていた。

でも、さすがに国境で流暢な英語を話す小滝先生には感心した。国境には、体の大きな、しかも恐そうなアメリカ人の警備官を相手に、スムーズに対応していた。もし、自分が一人で国境を越えようと思っても、警備の人が恐くてまともに話もできないと思った。

国境は我々島国育ちの日本人にとって、なじみの薄い存在だが、実際、国境付近を見て驚いた。なんと、国境上にある山々の木々は刈り倒され、ちょうどモヒカンのような感じだった。

アメリカに入ると、さまざまなところに立ち寄った。勿論、ゴルフショップもだ。大型ショッピング店があった

ので、そこに行き昼食を取る事にした。昼食が済んだところで、別々に行動することにした。そこで、私は日本人がいかにか流行モノに弱い人種であるかを知った。小滝先生と岡本先生が、タイタニック号が沈没した時の新聞を買って、はしゃぎまくっている姿を見てしまったのだ。この姿は他の学生には見せたくないと思った。それだけではあき足らずに、オリジナル・サウンド・トラックや本まで買いあさる二人だった。その時の二人はまるで子供のような感じだった。結局、この二人もミーハーだと思うと少し安心した気分にもなった。

ストロー・インディアンの聖地 ロング・ハウスを訪ねて

拓殖大学北海道短期大学教授 小滝 聡

プレーザー・バレー大学付近には、9000 年もの昔から先住民族のストロー族が住んでいる。

ストロー族の人たちと拓大の学生とはすでにこの研修を通して 4 年の交流がある。毎年、研修最後の日に行われる送別会に公演に来てくれ、そこでストロー文化を紹介しながら踊りを披露してくれる。そして、最後に彼らの文化を紹介するために学生たちに彼らが日常使用している楽器や装飾品など豪華な記念品を贈ってくれ

る。

この種族の人たちとの交流を深めるきっかけを作ったのは、96 年の研修団の引率を引き受けてくれた、小野寺・橋本の両先生だ。北海道のアイヌ文化を紹介しながら、ストロー族の人たちと懇親を深めた。以来、彼らの方も北海道の学生に対して特別な親近感をいただくようになったという。

その彼らの伝統的な文化を紹介し伝承しようというのが、このロング・ハウスだ。杉の木のできた大きな家が展

示館でその中に伝統的な模様の生活器具や道具が展示されている。

もともとストロー族は、サケを主な食料として生きてきたという。プレーザー川はロッキーを源流とする大河。大昔から、種族はそこに遡上するサケを頼りに生活をし、プレーザー川に沿って 9 の集落があった。サケは食料でもあり、靴やバッグの材料でもあった。サケの捕獲、利用方法の変遷はよく分かるように展示され説明を受けた。

家の外には広い草原がありそこに

ひときわ目立つ大きな岩がある。この岩が聖地のシンボルでもある。この岩にまつわる伝説は、その昔、創造主はストロー族の3人のリーダーに命令をくださった。その命令とは種族に文字を教えることだった。ところが、その3人は従わず文字を教えなかった。怒りを感じた創造主はその3人を岩に閉じこめてしまった。その結果、岩には3人の魂が込められ不思議なほど

つよい靈感が宿るようになったと伝えられている。

今も多くのストロー族の人たちがここを訪れ、祈りを捧げ、岩を崇拜する。またロング・ハウスのなかでは杉の樹皮を使った縄作りが体験できる。我々一行も若いストロー族の青年の指導の下に縄作りをし、それをおみやげとすることができた。この種族の芸術文化は生活の一部。その点でアイヌ

文化と共通するものを感じた。西洋の芸術は飾り、観賞の対象。だから美術館、博物館が発達した。ストロー族が日常生活に芸術を積極的に取り込む努力をしていることに敬意を表したい。

現在彼らは、失われつつあった文化を取り戻し、誇りをもってその深い意味を理解しようと努力を重ねている。

私のホストファミリー

拓殖大学北海道短期大学助手 岡本 吉弘

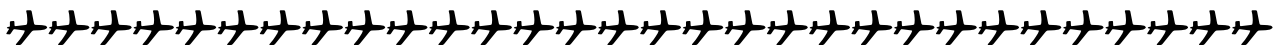
「グウアー、グウアー」、いったい何事だ。僕の睡眠を邪魔するこの鳴き声は。窓の外を見てみると何百羽ものカナダギースがトウモロコシ畑にやってきて、大集会を開いているではないか。そういえば昨日、マーシャがこう言ってたな。「ヨシ(私はそう呼ばれていた)、今日はね、息子達がトウモロコシを刈り取りに来るの。だから、ヨシが帰ってくる頃には、畑はきれいさっぱりよ。」それを思い出しながら、畑をよく観察してみると、たくさんのトウモロコシの粒が落ちていた。おなかを空かしたカナダギースが朝食を食べに来たんだと思い、ふと時計を見た。おっと、まだ午前5時ではないか。まあ、初めてカナダギースも見れたし、彼らもおなか为空いてたから今日のところは許してあげよう。しかし、この時僕は、この日から帰国までの1

週間、彼らが毎日起こしに来るとは気持ちもしなかった。

前置きはこれぐらいで、私のホストファミリーを紹介する。フレーザーバレーの中心街から2キロほど離れた静かな農業地帯の一角に Neufild Farm がある。私は3週間、ここで生活をした。Neufild Farm では食用トウモロコシ、キュウリ、露地メロン(キャンタローブ)、養鶏(ブロイラー)、リンゴ、西洋ナシ、ネクタリン、ブルーベリーそしてラズベリーを栽培していた。この農家の主であり、私のホストマザーがマーシャだった。彼女は69歳で、旦那さんを7年前に亡くしていたのだった。そのため農場の仕事は息子たちにまかせ、彼女は庭にある菜園で毎日汗を流していた。マーシャはブルーベリージャム、リンゴスナックやサーモンフレークも自分で作る。

したがって毎日の食材はそこで生産したものだった。ミルクと卵以外は完全自給自足である。これには私自身大変驚いた。

マーシャは厳格なクリスチャンで、仕事の合間を見ては教会でボランティアをしていた。週末になると、私を教会に連れて行ってくれ、みんなに私を紹介してくれた。礼拝の後、牧師さんの家で昼食をご馳走になった。また週に一度、知的障害者の世話をしていた。69歳とはいえなんとも元気な女性だった。毎朝、毎晩たくさんの話しをした。キリストの教えも学んだ。とてもすばらしい3週間だったが、ただ1つだけつらいことがあった。それは、小滝先生を始め、学生達が毎朝大学で会うたびに、「未亡人下宿はどうだった...?」と尋ねられることだ。いつも返答に窮した。



《インターネットでみつけました！》

アボッツフォード深川両市の姉妹関係調印式 名前:笠原 修 98年08月04日09時25分

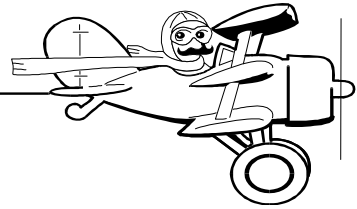
日本の皆さんこんにちは、特に深川市の皆さん、9月12日の姉妹都市の正式な調印式で会いましょう。私は翻訳を仕事としている笠原です。今回カナダのブリティッシュ・コロンビア州のアボッツフォード市の代表団の通訳として、そちらを訪れることになりました。どうぞよろしく。

私は26年前に日本を離れたとき、日本に26年間帰っていません。これが26年ぶりの帰国です。北海道札幌へは68年のクリスマスに訪れているので、ほぼ30年ぶりの北海道入りになります。日本語も随分忘れましたが、この春、深川使節団の方々アボッツフォードを訪れた際、両市を代表する人々の演説を通訳しながら、ようやく日本語にも自信が戻って来ました。私のような移民は英語もマスターできなければ、日本語はドンドン忘れる、おまけにボケ(?)が始まったようで、中途半端な自分にイライラさせられることが多いのですが、そんな自分でも皆さんのお役に立てるのが、新鮮な自己発見となりました。

アボッツフォードは西の玄関口晩市(バンクバ-)から車で一時間程車に入った所で、米国との国境にある町です。晩市がアジア系移民の流入でますます多民族化しているのに比べ、アボッツフォード市はメノナイト・クリスチャンの強い白人主体の田舎町です。ユニバシティ・カレッジ・オブ・フレイズ・パレ-という大学があって英語を習いに来る日本人留学生が多く、町で会って話しかけると、みんないい町だっていってくれますが、住みついている日系人は余りいません。

まあ積もる話しは色々ありますが、とにかくその調印式がこのウェブサイトで生中継されるって話しですから、前もってここでご挨拶、という次第です。どうぞよろしく。(「世の裏を見せに照れるか配所月」- 越後曇天)

募集しています！



◎「ホストファミリー」……………現在 41 家族の方が希望しています。

《1998 年 4 月以降に外国人を受け入れたホストファミリーの方々を紹介します。（順不同）》

辻 茂子さん・渡辺 優さん・菊地久美子さん・東出治通さん・須見郁代さん
嶋 義裕さん・轡田淑子さん・宇野富美子さん・佐藤和子さん・鈴木和子さん
茶畑誠一さん・柴田 久さん・藤岡光一さん・山口幸一さん・田中慎吾さん

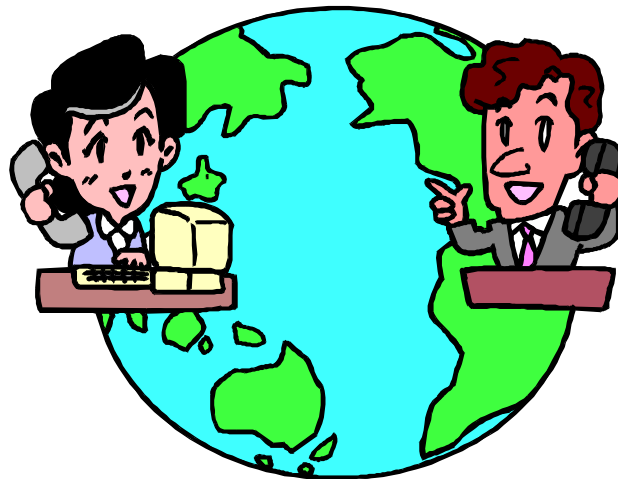
◎「通訳・翻訳ボランティア」… 現在 19 名の方が希望しています。

◎「深川国際交流協会会員」……………現在、一般会員は 81 名、賛助会員 51 団体です。

【問い合わせ先】

深川国際交流協会事務局（深川市企画課） ☎26-2215

世界に発信する深川地球市民



【編集担当】

深川国際交流協会 企画広報部会 広報編集委員会

編集長：南部雄二 副編集長：寺下良一

編集委員：池田敏江・上垣由紀子・橋本 信・高橋保之・谷口保幸